

十六夜咲夜という人物をご存じでしょうか。

この質問をすると大抵の人はこんな単語を並べる。

紅魔館のメイド長。紅い悪魔の従者（スカーレットデビル）。瀟洒。妖怪の館にいる異分子（にんげん）。

館で働く妖精メイドたちからは、鬼のメイド長、鉄面皮などなど。

それらは間違っていない。事実のある側面を的確に突いている。

けれど、私からすればそれは真実ではあるけれど、同時に十六夜咲夜という人物の、確かに側面でしかないのです。

これからする話は、人によってはにわかには信じ難いことかもしれない。そんなわけあるかと、笑い飛ばす者もいるだろう。

でも私は最初に「待て」と言いたい。

そんなことを言う人たちは、紅魔館での彼女を見たことがあるのだろうか？

たまたま人里に買物に現れた彼女を見て思っただけのものではないだろうか。あの完全で

瀟洒に振る舞うメイド長が、自分と主の品格を損なうような——いや、損なうというのは言い過ぎかもしれないが、「イメージと違う」というような感想を外部に与えるとは思えないのだ。あなたたちの知っている彼女は、＼お出かけの為に洒落をした＼十六夜咲夜という可能性はないだろうか。

ここまで言うとは半分の方は「まあ、確かに」と渋々納得しようとしてくれる。

この渋々というのが厄介で、彼女のすごいところなのだ。私がどんなに筆舌を尽くそうと、感情の限りに訴えようと、完全には疑念が拭えないのだから。それだけ彼女の装（よそお）いは強固なものなのだ。

残りの半分？

言わずもがな、それこそ「そんなことあるわけがない」と一言に切り捨てる信者たちさ。

落ち着いていて優雅な佇まい、さりげなく配られる気遣い、誰もが目を奪われるような容姿。頭の良い彼女は自分の武器を心得ている。

それらを駆使して人々を欺（あざむ）き続けているのだ。

そんな彼女の真実を知っているのは紅魔館に住む者達だけ。いや、紅魔館に住んでいても知らず過（あやま）ちしている者も多いだろう。

私だって最初は気づかなかった。

気づいた後も信じられなかった。

だから、その真実を説明して回ろうが信じられぬというのも無理からぬことと理解はできる。真実を吹聴（ふいちよう）して回ろうとも崩れぬ確固たる位置を手に入れた彼女ではあるが、私は今一度だけ語ろうと思う。

私が見た本当の彼女の姿。

吸血鬼の館らしからぬ、鏡写しに反転した姿の、その正しい見方を。

これはある日、私——紅美鈴が見た十六夜咲夜という皮を被った魔性の存在を認めた時の、その経緯を綴ったお話です。

二

季節は夏の盛り。

燦々と降り注ぐ光と言えば風流だけれど、門番の仕事に就く私にとって夏場の太陽光はざらざらと突き刺す痛みと同義なのだ。

「暑い……いや、熱い……」

いつものように館に近づく者がいないかと門番としての責務を果たしてはいるが、どうにも背筋がピンと張らない。

粘土ようなずっしりとした暑気が身体に纏わり付いてくる。真夏の空気は一年でもっとも重

いものとして感じる。冬よりも高い空から、その高さの分だけ錘（おもり）となって乗っかってくるのだ。

張り巡らす「気」も緩みがちで、だからこの時期はいつも気づくのが遅れてしまう。

「ご苦労様」

「……あ、咲夜さん。お疲れ様です」

すぐ背後まで来ていた彼女の存在に、声を掛けられるまで気づかなかった。

普段はこんなことは無いとだけ弁明させてもらう。

こんな事態になってしまうのは夏ということもあるけれど、咲夜さんの能力が高いからで（わざと気配を殺しているわけではないんだけど、気配は掴みにくい）、更に言うならば、気が知れた相手ということでの私のセンサーに引っかかりづらいのだ。

本当だよ？

「今日も暑いわね」

「そうですね。こう暑いと気が引き締まらないですよ」

「あなたはいつも緩んでいるでしょう」

「そ、そんなことは……」

「じゃあ春も秋も冬も、どこかの本泥棒に侵入されるのは何故かしらね」

「ええつと……それは魔理沙さんが手練れだということ」

「あら。私は魔理沙だなんて一言も言っていないけれど？」

「言ってるようなもんじゃないですか？」

「それに手練れの侵入こそ第一に防がなくて何の門番よ。どうでもいい相手なら館に侵入されても脅威はないからいいけれど、手練れ相手はせめて時間稼ぎくらいいしないと。そうすれば館の方でも対策する時間ができるのだから。お嬢様の安否に関わる場合もあるのよ？」

「あはは……ごもつともで」

私の質問には答えず正論だけを言ってくるのにはもう慣れっこだけれど、相変わらず手厳しいなあ。

「ま、いいわ。今に始まったことじゃないし。それと、はい……飲み物とタオル」

「わっ、ありがとうございます」

こうして手厳しい中にも優しい面もあるから憎めないんだよね。

咲夜さんが持ってきてくれたのは氷がたっぷり入ったアイステイーと、冷たくした濡れタオルだった。

遠慮なく貰ってまずはお茶を一気飲み。身体の中が身震いするくらい冷えていくのが分かる。空のグラスと引き替えにタオルを貰って顔と首回りを拭く。こちらも火照った身体にとても気が持ちが良かった。

使い終わったタオルと引き替えに再度渡されたグラスにはなみなみとアイステイーのおかわ

りが注がれていた。

今度はちびちびと口の中に運ぶ。この一連の流れももう慣れたものだ。暑さが連日こんな感じなので嫌が応でも慣れてしまったというべきかも。

「変わったことはない？」

「ええ。不届き者もこんな暑さじゃ家でだらだらしてますよ、きっと」

「そうだといいわね」

そう言った咲夜さんがちらと視線を左手に向けた。

釣られてそちらを見ると、紅魔館の高い塀をたつた今、箒に乗った白黒が飛び立つところだった。

「あ……」

「家でだらだら、ねえ……」

「ひえっ、っ、捕まえてきますう〜！」

咲夜さんの平坦な声が逆に怖くて私は慌てて侵入者が飛去った方向へ駆けだした。

「はあ、はあ。だめでした……」

数分後、せっかく拭った肌に大量の水滴を張り付かせながら私はすごすごと戻った。

この時、いかにも大変でした、という雰囲気を出すのが叱責を軽減するポイントです。

「お帰り」

「す、すみません。かくなるうえは敵の本陣に突貫してくる所存で——」

「今日の魔理沙は本当に遊びに来ただけだから別にいいのよ。さつきパチュリー様にお茶を煎れに行った時に訊いたらそうだって」

「え。ええ。早く言つて下さいよお。せっかく引いた汗がまた……」

「これに懲りて反省する時はきちんとして反省なさいな。あなたの考えはバレてるわよ」

「あ……えーっと、あはは……」

どうやら私の不真面目な内省はお見通しだったらしい。流石に一筋縄じゃいかないや。

それはそうと、追いかけて損をしたのはそれはそれで事実。身体を動かすのは嫌いじゃないけれど、無為なことに終わった後の精神的疲労は肉体の比じゃないからあんまり好きじゃないのだ。

肌に服がべっとり張り付いて気持ちが悪い。

額やこめかみから汗が滴り、足下に身体と繋がらぬ影を作り出す。

ミーン、ミーンという蝉の鳴き声がいつそう私の身体から汗を絞り出しているように感じられし、吹き出た汗が顔のラインを伝って顎まで流れていく感覚、これあんまり好きじゃないんだよね。たかが水の一滴の動きなのに、妙にはつきりと感じられるから。

居心地が悪い中、咲夜さんを見やると彼女は汗ひとつかいていない。

この暑い中、じつとしていれば水滴の一粒も滲み出てきておかしくないはずなんだけど。そういう体質なんだろうか？

ちよつと羨ましいなと思っていると咲夜さんが紅魔館の門を開けた。

中に戻るのかな？

そう思ったんだけど、彼女は一向に中に入っていかなかった。それどころか、客人を招き入れるかのように開けた門の横に立っている。

「ほら、さっさと行つてきなさい」

「へ？」

「お風呂に水を張つてあるから入つてさっぱりしてきなさい。それまで少し代わつてあげから」

「え、でも……」

「さっさと行く！ 時間がもつたいない」

「は、はいい」

こつん、と咲夜さんが一回片足を鳴らす。躡られた犬みたいに私はその音を聞いただけで反応して屋敷の玄関まで走つてしまう。

背後を振り返れば門を閉じ、その前で青と白の人影が背中をこちらに向けて立っていた。

私とは違つて背筋がピンと伸びていて、とても格好良く映る。

扉に手を掛けたところであつて、ふと気づく。

——ああ、最初から私と交代する為に来てくれたのか。

忙しい咲夜さんは着替えたり軽く汗を拭くくらいはするだろうけれど、お風呂でゆっくり汗を流すなんて、仕事の途中でするわけがない。こき使っている妖精メイドたちにもそんな暇はないだろう。

だから、既にもう水が張ってあるというのなら、最初からそのつもりだったということだ。

タオル一枚程度では首から上はさっぱりしても、身体に張り付く不快感までは取れない。

走ったせいで再び汗をかいてしまつて、拭いたのが無駄に終わつてしまつたけれど、そこは自業自得。それに、風呂に入つてしまえば同じことだ。

最初のタオルとアイスティーこそが咲夜さんの気遣いの本質だったのだ。

なぜなら最初から風呂に入つてこいと言えればそれで済む。タオルもアイスティーも必要ない。「やっぱり優しいね、咲夜さん」

面と向かつて言えば「そんなどうでもいいこと」と切り捨てられるか、「ばか言つてないで早く行ってきなさい」と逆にしかられるかするようなこと。

そんなことを改めて口に出してみる。

口に出すとそれが本当のことだと自分の中に実感として宿る。

私の眩きが聞こえたわけではないはずだけれど、咲夜さんが門の向こうでこちらを振り返つて

いた。

視力の良い私には分かる。目が笑っていない。

お小言が飛んでこないうちにさっさと行ってこよう。

いくら汗をかかないからといって、この暑さが平気だというわけではないだろうから。さくつと終わらせて交代しよう。

その時には私もタオルと冷たい飲み物でも持っていこうか。優しさには優しさで。厚意には厚意を。

この時の私は、そんな感じで単純に考えていたのだ。